

とした時、著明な崩壊過程の促進を認め、いわゆる catabolic effect を有する steroid 性格を認めた。

59に対する追加 (名古屋大) 蜷川 映己

私達は glucocorticoid の catabolic action に注目して研究を進めていますが、糖原性アミノ酸の1つである serine を pyruvate にする酵素, serine dehydrase が, glucocorticoid により regulate されていることを insulin 欠乏下に明かにしましたが, progesterone についても同様に活性が, 2~3倍に上昇し, progesterone の protein catabolic action の一側面を明かにしえたと思えますので追加致します。

60. pregnanediol 療法の新しい適応症

(慶応大) 尾島 信夫

5 β pregnane 3 α 20 α diol の微量連続内服による pregnanediol 療法の適応症として月経前障害, 月経時障害, 更年期障害及び自律神経失調症, 瘰癧等については本邦婦人科皮膚科の諸家から既に多数の治療報告が発表されておりその効果は確実とみなしてよいと思う。更に追加すべき適応症と思われる2, 3の疾患についてのべる。

乳房痛及びいわゆる乳腺症: 周期的または持続的に乳房痛を訴えた。12例ではその効果が+3, +6, +3例であり, 指頭大有痛性の腫溜をみとめた12例では+6, +4, +2例, 物差しで経過を比較し得た12例では-1, +5, +2, +4で多くは次第に縮小又は消失した。真性の腫瘍と誤診せぬように注意が必要であるが, いわゆる乳腺症は効果確実と思う。

肝斑: 本症は伊崎(岩大皮膚科)によつて発見された適応で, 彼は60例に用いて68%の効果を報告している。私も他の適応症をもつ4例の本症に行つて+3, +1という好成績をおさめ新しい適応と考える。

子宮腺筋症: Heckel は子宮内膜症をも適応に入れたが私はむしろ疑をもっていた。併し子宮腺筋症とみられる劇痛ある6例に本療法を試み, 4例に苦痛の著しい軽減をみたので, 子宮の温存がのぞましい症例にはやや試みるべきものと思う。

器質的異常のない不妊症: 不妊を訴え, または内心, 児をのぞんでいた者で月経障害等に対して私自身が本療法を行つた51例の主婦のうち9例の妊娠成立をみ, 偶然とは思えなかつた。そこで新患連続1000例中から21才乃至30才で無精子, 無排卵, 卵管閉塞例などを除いた不妊群74例と同年令の初妊婦群67例とを捨て, 月経障害のある率を比較して前者59%, 後者31%を得, その差が有意

であること, 従つて月経障害も妊孕性に影響し, 本療法によつて妊孕率の増加も可能であることを知つた。

61. 合成 progestin の中枢抑制作用

(京都府立医大) 村上 旭, 東山 秀聲

各種の合成 progestin 剤を健常雌ラットに1日1mg, 14日間, および30日間連続皮下投与した場合の間脳下垂体一性腺系, および副腎系に及ぼす影響を各種内分泌臓器の重量 ^{32}P -relative specific activity (R.S.A.), ならびに腫細胞像の面から検討を加えた。

17-Acetoxyprogesterone (17-AP) 系, 19-Nortestosterone (19-NT) 系の progestin, DMS および estrenol 系の ethynylestrenol (EtEL) を14日間投与することにより卵巣重量減少, および $\text{Cl-}^{32}\text{P-R.S.A.}$ の低下がみられ, 投与日数を30日間に延長するとこれらは更に著明となつた。間脳, 下垂体においても同じ傾向が認められた。また腫細胞像は17-AP系の MAP, 4°MAP , 19-NT系の EtNT, EtEDA, EL 系の EtEL 投与により, 投与開始後まもなく発情間期が持続し, 投与中止後は約1週間すると軽度の連続発情を持続し, この期間を過ぎると正常周期を回復した。これらのことから, これらの progestin には間脳下垂体一性腺系への抑制作用が強く, 下垂体 gonadotropin の分泌を抑制すると推測することができる。

次に副腎系に対しては EtNT, EtEDA, EtEL などによつては副腎重量の減少, $^{32}\text{P-R.S.A.}$ の低下は軽度であり, 間脳下垂体の変動と比較しても軽度であつた。17-AP 系の MAP, 4°MAP , および DMS では重量, $^{32}\text{P-R.S.A.}$ ともに投与日数に応じて減少し, 間脳下垂体の変動と同じ傾向を示した。なお, 4°MAP では MAP によつてほど副腎萎縮は強くないが, 19-NT系に比較するとなお著明である。このように C6 α 位に methyl 基をもつ progestin では間脳下垂体一性腺系への抑制作用が強く, ACTH 産生, 分泌に対し抑制効果を示すが, 4°MAP のように C6 位の dehydration による二重結合の存在は ACTH 産生分泌の抑制効果を弱めるであろうと考えられる。また 17-AP 系 progestin や DMS の副腎系に対する影響は glucocorticoid 様の作用に似ているが, その他の glucocorticoid 様の直接作用である, thymolytic effect や antiglarulom effect は弱く, partial dissociation が認められ, これらの中枢抑制作用はきわめて特異な作用であると考えられる。

62. 炭酸脱水酵素の組織化学的研究

(岡山大) 楠本 喬

1933年 Meldrum & Rought が赤血球中に炭酸脱水酵